

サンマ大型魚の漁況変動について

小林 喬

中南部千島海域から道東海域でのサンマの好、不漁は、中型魚よりも大型魚の多寡によって左右されるといわれている。そこで、漁況変動の内容を明らかにするため、1972年から'79年までの8カ年の資料を用いて、大型魚を対象に魚群の来遊状態を検討した。

その結果、好漁年（1973年、'75年、'78年、'79年）は、漁期初めの8月下旬から漁期末の10月下旬頃まで、南下索餌期の魚群が波状的に順次出現し、その密度は5,000～15,000尾/網と高く、肥満度も4.4～5.0と高かった。一方、不漁年（1972年、'74年、'76年、'77年）は、魚群の出現数も散発的で、密度も5,000尾/網と低く、肥満度も4.2～4.5と低かった。さらに不漁年の特徴として、漁期初め（1976年）あるいは漁期半ば（1972年、'74年、'77年）で南下索餌期からより密度の低い産卵準備期へと移行することがあげられる。

A167 北水試研報 35 1-28 1990

ホソメコンブの群落形成が阻害される原因についての一考察

阿部英治・名畑進一・垣内政宏

小樽市忍路湾の湾奥水深1～1.2mの緩斜面岩盤上において、通常ホソメコンブ群落は形成されない原因を明らかにするため、その場にロープを張り付けて、ホソメコンブを発生させ、その群落形成について水深30～40cmの平磯の場合と比較した。

その結果、ホソメコンブ群落は平磯とロープ施設に形成されたが、ロープ施設に隣接した同じ水深の緩斜面岩盤には形成されなかった。水深1～1.2mのロープ施設を含む緩斜面岩盤のホソメコンブ胞子体の葉長は平磯の個体よりも小型であったが、その成長速度は平磯のそれに優った。ここのコンブ胞子体は4月～6月に主としてエゾバフンウニに摂食されたが11月～翌年2月にはウニ類に摂食されなかった。水深1.2m地点の水温、pHおよび照度はホソメコンブの各生活期に適していた。しかしながら、流速は水深30～40cmの平磯上よりも約65%下回った。水深1～1.2mの緩斜面岩盤ではホソメコンブの2n世代期の群落形成に関して障害がなかった。それゆえ、ここで通常ホソメコンブ群落は形成されない原因は、遊走子の付着過程を含むn世代期にあると考える。

A169 北水試研報 35 37-60 1990

新しい若齢ケガニの採集器具と採集結果

佐々木 潤・名平 勇

本報告は、若齢ケガニの採集を目的とした採集器具「名平式ビームトロール」の開発結果とこの器具を用いた若齢ケガニの採集結果である。

この採集器具の特徴は、開口のために袖網部に鉄製のビームを持つこと、潜砂している若齢ケガニを採集するために胴網部の開口部に歯の付いたビームを持つこと、大量の泥が入網した場合の処理のために胴網部が脱着可能なことである。この器具を用いて、1989年10月3日に北海道東部太平洋岸桂恋沖、水深36m地点で甲長10～52cmのケガニ157個体を採集した。

A168 北水試研報 35 29-36 1990

稚魚ネット表層曳きによるホッケ稚魚採集個体数の日周変化（短報）

土門和子・鳥澤 雅

北海道積丹半島沖の日本海の2点（St.1 : 43° 30' N、140° 30' E、St.2 : 43° 30' N、14° 00' E）で、3時間ごとに稚魚ネットによる表層10分曳きを行い、採集されたホッケ稚魚の個体数を調べた。その結果、ホッケ稚魚は日中はほとんど採集されず、大部分の個体は夜間に採集された。また、夜間でも、特に日没直後に採集個体数が多い傾向がみられ、稚魚ネットの表層曳きによるホッケ稚魚の採集個体数には日周変化があることが示唆された。

A170 北水試研報 35 61-62 1990

水中テレビカメラによる若齢ケガニの観察（短報）

佐々木 潤・三宅博哉・本間隆之

1989年10月3日、釧路市桂恋沖水深36m地点において水中テレビジョンロボットを用いて、若齢ケガニの生態を観察した。

観察地点は、エゾハマグリの殻が散乱する凸凹の多い泥混じりの砂地で、透明度は非常に低いことがうかがわれた。底層水温は15℃であった。甲長約5cm、3cm、1cmと推定されるケガニ個体が、摂餌行動、グルーミング、および潜砂行動などを活発に行っていた。

A171 北水試研報 35 63-64 1990